



日本の国土は、亜寒帯から亜熱帯にまたがる大小の島々からなり、そこには屈曲に富んだ海岸線と起伏の多い山岳など変化に富んだ地形や各地の気候風土に育まれた多様な動植物相が見られます。

「モニタリングサイト 1000」では、このような日本列島の多様な生態系を、高山帯、森林・草原、里地、湖沼、湿原沿岸・浅海域、小島嶼に分け、あわせて 1000 か所程度のモニタリングサイトを設置しており、2003 年度より調査を実施しています。基礎的な環境情報の収集を長期にわたって継続することで、日本の自然環境の質的・量的な劣化を早期に把握し、得られた成果を保全施策や学術研究に活用することを目的としています。

森林・草原のモニタリングでは、樹木を長期的な環境変化の指標として、地表徘徊性昆虫を短期的な環境変化の指標として、鳥類を広域的な環境変化の指標として取り上げ、20 のコアサイト、28 の準コアサイト、約 420 の一般サイトで調査を行なっています。

- ・コアサイト： 毎年調査を行ない、毎木調査、落葉落枝・落下種子調査、地表徘徊性甲虫調査、鳥類調査を実施
- ・準コアサイト： 5年に一度(一部は毎年)調査を行ない、毎木調査、鳥類調査を実施
- ・一般サイト： 5年に一度調査を行ない、鳥類調査を実施

鳥類調査では、各サイトに 5 か所の定点を設置し、繁殖期と越冬期にそれぞれ 2 日間かけて 4 回(1 地点 1 回あたり 10 分間)、周囲に生息している鳥類の個体数調査を実施しています。

「陸生鳥類調査情報」は、結果の速報や関連情報をお知らせするために、2009 年より毎年 2 回発行しています。バックナンバーは以下よりご覧いただくことができます。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/index.html>

# モニタリングサイト1000

## 陸生鳥類調査 情報

2019年 8月号 Vol.11 No.1



*Gallinago hardwickii*  
Photo by Kei Matsumoto

### 結果速報

#### モニタリングサイト1000 2018年度越冬期 一般サイト結果速報 森本 元 (日本野鳥の会)

全国約1,000か所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは約420か所を占める重要な分野です。調査には、多くの市民調査員のみなさまにご協力いただいております。森林・草原の一般サイトでは、概ね5年に1度、陸生鳥類調査(繁殖期および越冬期)および植生概況調査(繁殖期のみを実施)を行っています。2018年度の越冬期は、調査を61サイト(森林49サイト・草原12サイト)にお願いしました。そのうち、依頼した中から調査を実施できなかったサイトなどを除き、現時点でデータが集まり集計が完了している森林43サイト、草原12サイトの計55サイトのデータを用いて、中間報告いたします。

#### 記録された鳥類(2018年度)

合計121種(森林89種・草原87種)の鳥類が確認されました。これは昨年の103種を大きく上回りました。さて、2018年度はどのような状況なのでしょう。それを考える為に、ここでは、森林サイトについてのみを比較してみます。なぜなら森林サイトは、毎年環境や調査サイト数が安定しており、単年度での比較が可能だからです。草原サイトを除いているのは、草原サイトは調査サイト数が少なく、かつ、サイト間の環境の違いが激しく、単年では出現種数や種構成が安定せず5年ごとに比較する必要があるためです。2018年度は2017年度(森林サイト46サイト・94種)より3サイト少なく7種少ないという結果でした。調査地点数と出現種数の関係を考慮すると、この出現種数は昨年と同程度といえましょう。モニタリングサイト1000における鳥類調査を長年続

けた結果から、サイト数が増えると確認される種数も増加することが分かっているからです。年変動という観点では、2018年度は大きな変化はありませんでした。なお、2018年度の全体の種数が2017年度を大きく上回ったのは、草原サイトの種数が多かったからです。これは前述の草原サイトの年変動における不安定さが現れています。現時点の結果からは、2018年度は平年並といえそうです。

#### 出現率と優占度

次に、森林における出現率、優占度の上位種を表1、2に示しました(出現率:ある種の出現サイト数÷調査サイト数×100、優占度:サイトでのある種の個体数÷総個体数×100を平均したもの)。2018年度の上位種の種構成を、第3期5年間全体(2013-2017年度)と5年前の上位種構成の結果と比べて、検討してみましょう。モニタリングサイト1000の調査は、前述のように5年を1期として行っていますので、5年前の調査サイトは今回の調査サイトとほぼ同じサイトで調査しているため、ある年の結果と5年前の結果は、上位種の構成や順位がとても似ていることがわかっているからです。

例年の傾向としてトップ10の下位グループに入ることが出来る種の順位は年変動し、10位前後を行ったり来たりしますが、最上位種のメンバーはほぼ同じ傾向があります。まず第3期上位10種(森林サイト)を記しますと、その構成種はウグイス、エナガ、カケス、コゲラ、シジュウカラ、シロハラ、ハシブトガラス、メジロ、ヤマガラ、ヒヨドリ(五十音順)でした。この種構成は、2018年度の結果においても同様といえそうです。異なった点としては、2018年度は9位にルリビタキが入り、カケスは上位10種に入っていません。ですが、どちらの種も10位前後が定位置の種であり、年によりトップ10に入ったり入らなかったりしますので、これも例年通りといえましょう。

表 1. 2018年度越冬期の出現率の上位10種

a) 森林 (n = 43)			b) 草原 (n = 12)		
順位	種名	出現率	順位	種名	出現率
1	ヒヨドリ	100.0	1	ハシブトガラス	91.7
2	ハシブトガラス	93.0	2	ハシブトガラス	83.3
3	ヤマガラ	90.7	3	ヒヨドリ	66.7
4	コゲラ	88.4	4	カワラヒワ	58.3
	シジュウカラ	88.4		スズメ	58.3
6	エナガ	76.4		トビ	58.3
7	メジロ	65.1		ホオジロ	58.3
8	ウグイス	58.1	8	キジバト	50.0
9	シロハラ	55.8		シジュウカラ	50.0
	ルリビタキ	55.8		ツグミ	50.0

表 2. 2018年度越冬期の優占度の上位10種

a) 森林 (n = 43)			b) 草原 (n = 11)		
順位	種名	優占度	順位	種名	優占度
1	ヒヨドリ	15.6	1	スズメ	18.9
2	メジロ	8.4	2	ハシブトガラス	13.8
3	エナガ	7.4	3	ハシブトガラ	10.8
4	ヤマガラ	6.3	4	ハシブトガラス	8.0
5	シジュウカラ	6.1	5	カワラヒワ	5.5
6	ハシブトガラス	5.3	6	ヒヨドリ	4.1
7	ヒガラ	4.2	7	ツグミ	2.7
8	アトリ	3.8	8	ホオジロ	2.5
9	コゲラ	3.6	9	エナガ	2.4
10	マヒワ	3.0	10	コガラ	2.4

表 3. 5年前(2013年度)の森林サイトの上位10種

1) 出現率 (n = 48)			2) 優占度 (n = 48)		
順位	種名	出現率	順位	種名	優占度
1	ヒヨドリ	95.7	1	ヒヨドリ	15.2
2	コゲラ	89.1	2	エナガ	8.5
	シジュウカラ	89.1	3	シジュウカラ	7.7
4	ハシブトガラ	87.0	4	メジロ	6.8
5	ヤマガラ	80.4	5	マヒワ	5.4
6	エナガ	73.9	6	ヤマガラ	4.5
7	カケス	63.0	7	ハシブトガラス	3.5
8	メジロ	56.5	8	ヒガラ	3.4
9	キジバト	52.2	9	コガラ	3.4
10	ウグイス	50.0	10	カワラヒワ	2.8
	カワラヒワ	50.0			
	シロハラ	50.0			

さらに、ほぼ同じサイト構成である5年前の上位種(表3)とも見比べて見ましょう。いずれの結果からもヒヨドリが例年通りに1位であることが分かります。なんとといっても、冬の王者はヒヨドリです。表を見ていただくとお分かりいただけるように、出現率、優占度ともに1位であり、これはほとんどの年で同様です。ヒヨドリは留鳥で身近な種であるため、冬鳥というイメージがあまりないかもしれませんが、春と秋に多数が渡りを行っていることも良く知られています。複数の個体が群れを作り、秋口に移動していく様子は、バードウォッチャーにとっては季節の風物詩ですね。まさにそれを反映するかのよう、越冬期におけるヒヨドリの観察頻度は他の季節よりも上昇しています。ヒヨドリは普段から毎日のように目にするので、ついつい気がつきにくいですが、身近な鳥種にもこのような季節変化が生じています。そして冬の出現率に至ってはほぼ100%という高い値です。ところで皆さん、もっとも冬に身近な鳥というとは何でしょうか。このような質問を投げ掛けられた際の回答は、人によってさまざまだと思います。例えば、カモ類や、オオジュリンといったホオジロ類、大きな群れを作るマヒワやアトリの仲間、多数がやってくるツグミ類が頭に浮かぶという人もいるでしょう。しかし、それがヒヨドリだったということに驚かれる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。モニタリングサイト1000の結果は、こうした身近な鳥の気付きにくい変化を見つけさせてくれます。

他では、冬に大きな群れをつくる代表種であるアトリとマヒワが優占度にてランクインしています。これらの種は、渡来に年変動があることが知られています。別に記事の特集しましたので、3ページをご覧ください。

## メジロの出現傾向

ヒヨドリと同様に、留鳥ながらも、多数が渡ることが知られているメジロ。街中の街路樹や公園、庭木などでも普通に見られますから、どこにでもいつもいる鳥というイメージを持っていらっしゃる人も多いことでしょう。その一方で、渡りをするということは、観察率が年によって変化しているかもしれません。

そこで、今回はメ



ナンキンハゼの実を食べるメジロ (小野安行)

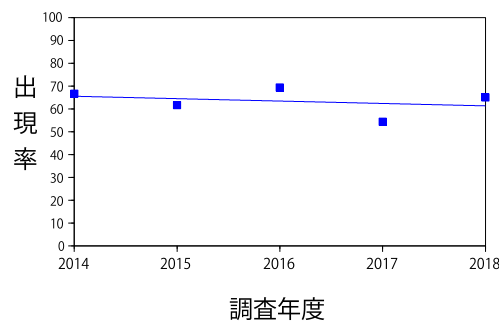


図 1. メジロの出現率の年変動

ジロの動向に着目し、この5年間の出現率の変化をまとめパターンを見てみました(図1)。約60-70%程度の出現率にて、驚くほどに安定しています。モニタリングサイト1000は5年で一巡する調査設計になっていますので、毎年調査している場所が異なっています。それにも関わらず、同程度の観察率であることから、冬のメジロは全国的にまんべんなく常に見られており、かつ、アトリやマヒワのように年による変動が大きい種であるとわかります。多数が渡りをする種同士であっても、かなり違った傾向が見られることは興味深いですね。

いかがでしたか。今回は、常に身近にいる留鳥ながらも多数が渡りもおこなうヒヨドリとメジロの動向についてご紹介しました。スズメの減少が数年前に話題になりましたが、よく知っている鳥であっても、年変化などは気がつきにくいものです。モニタリングサイト1000は、こうした「知っているようで実は知らない」基礎情報を明らかにできます。長期のモニタリングを行い平常の状況を把握し続けることの重要性を示す事例の一つといえましょう。

## 調査へのご協力ありがとうございました

今回の結果からも、毎年調査を継続するモニタリングサイト1000の「モニタリングの重要性」を感じていただけたものと思います。生物や環境の変化を把握できるようにするためには、毎年の調査結果の積み重ねを前提とした地道な調査が必要になります。この長期的な調査を絶えず継続していくことをご理解いただければ幸いです。日本の自然環境のモニタリングの実施には、大勢の人々のご協力による調査継続が欠かせません。引き続き、皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

2018年度越冬期の一般サイト調査には、73名の皆様のご協力をいただきました。最後にお名前を記し、お礼に変えさせていただきます(敬称略、順不同)。

嶋孝弘, 荒井浩, 中村正男, 稲田菊雄, 齋藤誠一, 磯海弘子, 阿部智, 奥田純子, 石川滋, 大河原吉衛, 今野怜, 鷺田善幸, 石川喜春, 関根一広, 石井省三, 平野賢次, 村井敏郎, 小笠原正博, 吉田良平, 多田英行, 高井正明, 岩田篤志, 水野寛美, 矢本賢, 渡辺靖夫, 岩本富雄, 揉井千代子, 沼野正博, 中井節二, 江島浩紀, 谷上和年, 柳田一郎, 柳田直子, 葉山政治, 江崎真南, 梅森綾乃, 橋口奈津子, 川島賢治, 篠原盛雄, 川崎康弘, 今堀英明, 中西正和, 井奥恵三, 水口竣太, 柳田和美, 柳田弘子, 飯澤可奈江, 五十嵐千穂, 津田浩, 小林繁樹, 大島孝之, 伊藤恭博, 大塚之稔, 森眞, 山田三夫, 渡辺健三, 渡辺貴美恵, 渡辺央, 野中純, 戸邊進, 高美喜男, 荒垣純子, 原田修, 門村徳男, 中西和夫, 川合正晃, 古南幸弘, 稲葉一将, 星英男, 齋藤充, 植阪架愛, 齋藤敏郎, 寺本明広

# 結果速報

## 2018年度 コア・準コアサイト鳥類調査 越冬期結果報告

植田陸之(バードリサーチ)

### 全体的には平年並み、しかし…

2018年度の越冬期は、19サイトで調査を行ない、合計で59種が記録されました。越冬期は年変動が大きく、記録種数、バイオマス共に多かったり少なかったりすることがあるのですが、そのなかで、2018年度は種数、バイオマス共に平均的な年でした(表1)。

その中で、何か所か2018年度のバイオマスが、例年よりも多かったサイトがありました。表1に黄色く示した那須高原、小川、秩父、綾です。その原因についてしてみると、綾はハシトガラスの記録数が多かったのが原因でしたが、それ以外の3サイトはアトリの記録数が多いのが原因でした。



図 1. 木の実にあつまるアトリの群れ (平野敏明)

表 1. 2010-18年度越冬期コア/準コアサイトのバイオマス。黄色く塗ったサイトは、2018年度のバイオマスが例年より多かったサイト。2017年度和歌山では1回しか調査を行っておらず、過小評価となっている

サイト名	越冬期バイオマス(kg/10ha)									
	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
雨龍	6.66	0.63	1.02	5.42	2.38	0.27	1.17	2.47	2.09	
野幌	21.44				29.51	24.32	15.98	26.44	12.04	
苫小牧	25.83	22.38	22.97	22.98	27.66	17.42	15.52	29.05	19.38	
青葉山	79.10				35.52	29.17	19.22	42.35	28.59	
小佐渡	14.09	18.88	10.47	38.07	8.88	23.20	10.93	10.67	11.66	
那須高原	2.31	12.70	3.58	4.78	2.65	7.02	3.84	3.95	11.67	
小川	22.68	10.84	7.41	24.16	12.46	23.71	16.92	25.67	54.12	
高原山				4.12					6.79	
筑波山				28.19					21.36	
大山沢	2.37	4.36	3.24	1.23	2.27	1.98	2.07	3.02	9.12	
秩父	3.26	10.39	5.84	8.16	18.25	9.18	4.53	10.59	24.53	
西丹沢				4.68					10.00	
富士		15.88								
函南	8.35					13.56				
愛知赤津	10.85	12.53	7.24	8.24	9.06	10.43	3.87	9.06	1.77	
上賀茂	15.61	33.13	23.41	24.68	30.16	22.83	21.06	18.06	23.05	
春日山		32.26						19.86		
和歌山	1.05	6.05	1.84	8.63	3.04	5.27	84.46	(1.3)		
半田山		1.74								
宮島				39.52						
市ノ又	5.42	4.64	2.73	2.81	8.92	6.26	11.01	7.76	9.08	
佐田山			13.41					9.37		
対馬龍良山			6.31					9.48		
粕屋		15.43					6.21			
椎葉				12.43						
綾	4.99	3.92	4.32	6.99	6.22	7.33	6.38	6.85	13.53	
田野	13.55	5.61	9.71	8.37	15.83	8.05	9.36	24.34	16.52	
屋久島照葉樹林	22.51						20.26			
屋久島スギ林			2.73					3.63		
奄美	35.48	10.21	14.27	14.31	23.35	23.80	21.43	27.22	20.31	
与那	30.44	23.33	20.04	21.93	22.49	29.25	22.64	27.80	20.44	
西表						21.84				
小笠原石門		3.35					6.53	6.53		

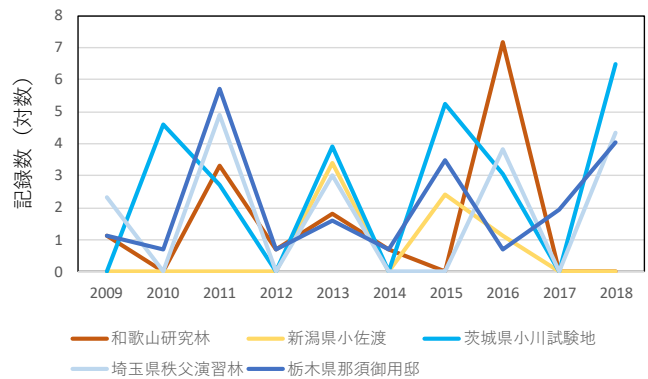


図 2. アトリの記録頻度の高い5サイトにおける記録数の変遷。記録数は対数で示した

### アトリの記録数の年変動

アトリはマヒワとともに森林を代表的な冬鳥で、また年による記録数の変動が大きい鳥です。

そこで、アトリの記録数がどのように変動しているかを、アトリが比較的高頻度で記録されている和歌山研究林など5サイトの記録をもとに見てみました(図2)。

それをみると、ある程度のパターンがみえます。2012、2014、2017年に少なかったのは共通していますし、多い年は、多少ばらつくのですが、それでも共通する傾向がみとれます。

この変動は何に影響を受けているのでしょうか？ よく木の実に豊凶の影響を受けると言われるのですが、東北森林管理局が調査しているブナの開花・結実調査をみると(<http://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/sidou/buna.html>)、2014年と2016年が顕著な凶作年だったのですが、2014年はアトリが少なく、2016年はそうでもない状況でした。また、豊作年の2013年と2015年は両年とも比較的にアトリが多く記録されていますが、アトリが多かった2011年のブナはそれほど豊作とは言えず、ブナの豊凶との関係は、あるようにも、無いようにも見えます。

豊凶との関係は、豊作年には食物が多いからアトリの個体数も多くなるという直接的な関係だけでなく、北が豊作だと北に残って南下して来なくなり、南では個体数が少なくなるという間接的な関係もあるので、単純ではないのかもしれませんが。こうしたことは長期的な情報が蓄積され、様々なパターンについて解析できるようになれば明らかになることかもしれません。引き続き解析作業を進めていきたいと思えます。

### 調査へのご協力ありがとうございました

2018年の現地調査にあたっては、岩本富雄、植田陸之、川崎慎二、高美喜男、瀧本宏昭、田中宏武、知花重治、中村 豊、濱田哲暁、平野敏明、外間 聡、柳田和美、梁瀬桐子、山崎康一郎、山崎優佑(敬称略)ほか多くの方々のご協力をいただきました。皆様に感謝いたします。

# レポート

## 鳥の種数が多い地域は季節によって変わる！ ～繁殖期と越冬期で対照的な気候と土地利用の影響～

河村和洋(北海道大学)

「北海道には鳥が多い」。こういった会話は鳥好きの間でよく聞かれます。しかし、東京出身で、大学時代に北海道の冬山を山スキーで駆け回った私は、疑問に思いました。春から夏にかけて夏鳥であふれかえる北海道ですが、冬にはカラ類やキツツキ類などの留鳥とわずかな冬鳥しか見かけません。季節によっては、北海道よりも関東の方が鳥は多いかもしれません。繁殖や越冬のために長距離を移動する渡り鳥の存在を考えれば、鳥の豊富な地域は季節によって変わる可能性があります。これまで広域的な野外データを用いて季節に応じた鳥類の分布パターンを調べた研究は不足していました。

そこで、全国の様々な場所で、同じ手法で調査されているモニタリングサイト1000の陸生鳥類調査の結果のうち、2009-2015年に繁殖期(4-7月)と越冬期(12-2月)のどちらでも調査された森林サイト254か所、草原サイト43か所のデータを解析しました。この解析結果が論文としてまとめましたので、その内容をご紹介します。

Kawamura K, Yamaura Y, Senzaki M, Ueta M, Nakamura F (2019) Seasonality in spatial distribution: Climate and land use have contrasting effects on the species richness of breeding and wintering birds. *Ecology and Evolution* <https://doi.org/10.1002/ece3.5286>

### 種数に影響する環境要因

まず、森林サイトの森林性鳥類と草原サイトの草地性鳥類を対象に、夏鳥・冬鳥(国外と日本を移動する種)、漂鳥(国内を移動する種)、留鳥、それらを合わせた全種の種数を算出しました。次に、各季節の種数に対する気候(年平均気温、最大積雪深)、地形(標高)、周囲の生息地面積(森林性種にとっての森林、草原性種にとっての開放地の面積)の影響を調べました。その結果、森林と草原の両方で、夏鳥・冬鳥、漂鳥といった渡り鳥の種数は、繁殖期には涼しく生息地が豊富な地域で、越冬期には暖かく雪



夏は寒冷な地域の草原で繁殖し、冬は温暖なアシ原で越冬するオオジュリン(三木敏史)。

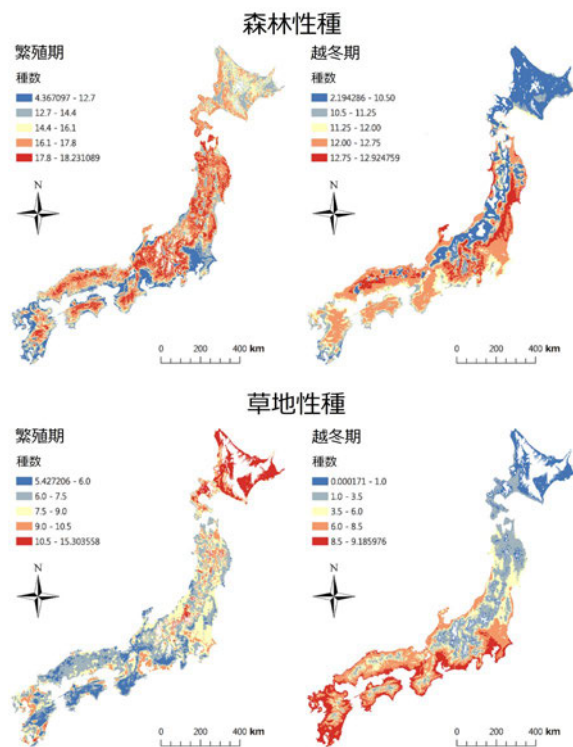


図1 鳥類の繁殖期(左図)、越冬期(右図)における森林性種(上図)、草地性種(下図)の種数の予測図。本研究で得られたモデルから、気候と地形、土地利用を用いて4haあたりの種数を予測しました。白色の部分はモデルの予測範囲外の場所です。

が少ない地域で多いことが明らかになりました。これを反映して、全種の結果も同様な傾向を示しました。一方、留鳥の種数は季節によってそれほど変わらず、森林性の留鳥では中程度の気温の地域で、草地性の留鳥では暖かい地域でそれぞれ種数が多くなっていました。

### どの地域もいずれかの季節で重要！

最後に、解析結果と全国の環境から、各地の種数を予測しました。東北の太平洋側や山地の一部は、繁殖期、越冬期どちらの季節でも森林性鳥類の種数が多いと予測されました。しかし、多くの地域ではいずれかの季節に高い種数を示しました(図1)。この結果は、日本全体の鳥類を維持していく上で、どの地域もいずれかの季節に重要な役割を担っていることを意味します。繁殖期を寒冷な地域で過ごす鳥類の多くは、越冬期を温暖で雪の少ない地域(国外を含む)で過ごす渡り鳥です。古くから人の土地利用が行われてきた温暖な地域には、原生的な自然はほとんど残されていませんが、こういった地域の生息地も重要だと考えられるのです。

日本全体で複数の季節で調査されたモニタリングサイト1000の結果を解析することで、「種数の多い地域」が季節により異なっていることがわかりました。つまり、国のようなスケールで鳥類が維持されていく環境を理解し、保全していくためには、鳥類分布や環境の季節性も考慮することが不可欠であることが明らかになりました。

## 担当者紹介

生物多様性センターの担当が宮田さんから田畑さんに、野鳥の会の担当が野口さんから菅野さんに代わりました。

**田畑 早紀** みなさん、はじめまして。今年から生物多様性センターで勤務している田畑早紀と申します。4月からモニタリングサイト1000の担当となりましたが、これまでは植物の仕事に携わることが多かったため、先日、勉強のために一般サイトの調査に同行させていただきました。普段から鳥の声を無意識に聞いていますが、じっくり聞く機会を得たことで段々と季節や時間帯による鳥の声の変化を意識するようになりました。鳥類の仕事はこれが初めてで、まだまだ勉強することが沢山ありますが、モニタリングサイト1000の発展のため尽力いたしますので、引き続き皆さまのお力添えを賜りたく思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



**菅野 良一** (公財) 日本野鳥の会自然保護室の菅野良一と申します。今年の4月に東京港野鳥公園のレンジャーから自然保護室に異動となり、モニタリングサイト1000陸生鳥類調査の担当となりました。サンクチュアリという「点」から日本全国という「面」に仕事の空間が大きく変わり、それに伴う自分の意識の変化を日々楽しんでいます。この数ヶ月間だけでも、北へ南へ飛び回り、調査員の皆さまの様々なお話を聞く機会に恵まれました。貴重なご意見を反映させていただき、より良い調査環境をご提供できればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



## 事務局からのお知らせ

### ● とりまとめ報告書と概要版パンフレットを今年中に公表します！

モニタリングサイト1000は、調査開始から5年ごとに生態系ごとにとりまとめを行っており、今年(2019)中に「第3期とりまとめ報告書」を公開予定です。さらに、モニタリングサイト1000事業を広く知ってもらうことを目的とし、陸生鳥類調査の結果だけでなく、他の生態系の結果も含めてわかりやすくまとめた「第3期とりまとめ報告書概要版パンフレット」を同時並行で作成しております。モニタリングの必要性を理解していただける内容を目指しており、各種活動にも役立ていただければ幸いです。完成しましたら、環境省生物多様性センターのホームページで公開しますので、もうしばらくお待ち下さい。



第2期調査で発行した森林・草原調査の概要版。今回はほかの生態系もあわせたものを発行します。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

### ● 日本鳥学会大会は9月13日から16日に東京都足立区 帝京科学大学で

今年の日本鳥学会大会は9月13日から16日の日程で、東京都足立区の帝京科学大学で開かれます。

学会というと、立ち入りにくい場所のように思いますが、日本鳥学会は学者よりも学生やアマチュア研究者の方が多く、開かれた会です。今年はより参加しやすいように、学部生以下の参加費を無料にしたり、1日だけのお試し参加(参加費が格安の1000円)を設けたりしていますので、興味のある方は、参加してみたいかがでしょうか？

大会のプログラムや発表内容などがすでにホームページで公開されています。本調査のコアサイトの結果を中心に

植田睦之・葉山政治・串田卓弥

シカの増加の影響が植生・宿主を通してカッコウ類へ

という発表もしますので、ぜひ聞きに来てください。

なお、1日だけのお試し参加は事前申し込みのみで、締め切りは8月末なのでご注意ください。

<http://osj2019.ornithology.jp/index.html>



## 事務局からのお知らせ

### モニタリングサイト1000 研修・交流会のご案内

菅野良一（日本野鳥の会）・植田睦之（バードリサーチ）

モニタリングサイト1000の事業は、皆様のご協力により第四期(17年目)に入りました。この大規模かつ長期的な調査を今後も継続していくためには、調査員の皆様の継続的な御協力が欠かせません。また、近年次世代の調査員の確保・育成が課題となっています。陸生鳥類調査では昨年度に引き続き、各地域でさまざまな調査活動をされている方の成果発表や情報交換を通して、参加者同士の交流を深めることを目的とした研修会を実施します。今年は、群馬県、愛媛県、東京都の3か所で開催することとなりました。新たに調査員を目指す方や現役の調査員の方々との交流、またエリアを超えた調査員の方同士の交流が深まるような内容としたいと思います。

詳細はホームページ等で追ってお知らせいたしますので、是非ご確認ください。



#### 参加申し込み先

専用サイト「日本野鳥の会 モニタリングサイト1000」で検索もしくはQRコードから

Fax: 03-5436-2635

(日本野鳥の会モニタリング係)

件名は「研修会申込み」とし、お名前、電話番号、メールアドレス(あるいはFAX番号か住所)、参加会場、参加日程、事例発表の有無(タイトル)、懇親会参加の有無をお知らせください。

### モニタリングサイト1000 調査研修会

【主催】 日本野鳥の会・バードリサーチ

#### 【開催場所】

<東京都> 2019年11月16-17日  
講義: 日本野鳥の会事務所(目黒区)  
実習: 国立科学博物館附属自然教育園

<群馬県> 2019年11月30-12月1日  
未定

<愛媛県> 2020年1月18-19日  
市内会議室および愛媛こどもの城周辺 (松山市)

※ 開催日時や場所等の詳細については、専用サイトにて情報配信いたします。以下のページをご覧ください。

<http://www.wbsj.org/mng/?p=987>

#### 【内容】

初日 13:00-17:00

モニタリングサイト1000の事業概要と成果を紹介します。また、参加者による事例発表や情報交換の時間を設けます。

※ 話題を提供いただける方を募集します。

講義終了後:懇親会

2日目 9:00-12:00

実際に野外に出て、鳥類のスポットセンサス法と簡易植生調査の実践していただきます

#### 【参加対象】

調査に興味のある方(経験不問)

(定員は会場の都合で30~40人程度まで。定員を超えた場合は参加できないことがあります)

#### 【参加費】

無料(ただし入園料や懇親会は実費を徴収)。

#### お問い合わせ先

日本野鳥の会 モニタリングサイト1000担当  
〒141-0031 品川区西五反田3-9-23丸和ビル  
Tel: 03-5436-2633 Fax: 03-5436-2635  
Mail: [moni@wbsj.org](mailto:moni@wbsj.org)